

第12回 国際協力セミナー



グアテマラから中越へ： 農村開発と復興支援の相違点

6月16日(月)18:30— 環境棟7階 講義室

講師：河内 毅氏

(社)中越防災安全推進機構

元青年海外協力隊(森林経営&村落開発@グアテマラ)

議事：

グアテマラでの経験

- グアテマラでの活動：2002-04 青年海外協力隊 GIS 基礎教育、炭焼き指導

考えたこと：価値観を押し付けていいのか？援助のあり方は？必要とされている援助とは？援助は与えられるだけなのか？日本の知名度は低い。

- グアテマラでの活動：シニア隊員（チーム派遣のリーダーとして）

目標：農家の収入向上、農業問題解決能力向上、プロジェクト運営能力の向上

期待される成果：住民の組織化、持久力向上による家計支出の削減等

手順：講習会・農業技術指導を通じてグループ・リーダーを発見 組織化 グループによるプロジェクト運営

- 農業技術向上として行ったこと：農業の適正利用、有機農業、地力向上（地域資源を有効に活かす方法や苗床や苗間を開けた新技術の導入）東洋野菜の生産（市場が既にある農産物の導入を図ることで農民のモチベーションをアップ）サヤインゲンの販売
- 住民組織化について：C村でのWSや講習会に人が集まらない 住民との話し合いで何が問題化を分析 先進視察等を行う 自らが定期的に会議を行うように。女性グループがケーキの製造 うまくいくと住民のやる気が出る（簡単かつ収益が上がった！）。P村では女性グループが養鶏を開始、銀行からの融資も自分達で調達するなど予想外の事も。
- 調理講習会：換金作物として生産されながら、地元では食べる習慣がないために、規格外として捨てられていた野菜の有効利用を図る。同時に女性達のコミュニケーションの場として、女性グループの組織化の土台となった。

結論：提案と違和感

グアテマラでは住民が自分達から主体的に活動し始めるようになった。グアテマラの農村は経済的には貧しいものの活気や未来が感じられ、人とのつながりもある。対する日本では、農村の過疎高齢化・耕作放棄が進行し、都市部においてもコミュニティの崩壊などから来る社会問題が山積。

グアテマラで言い続けてきたような住民による「主体的な問題解決」は日本で出来ているのか？

中越復興市民会議へ



中越震災復興との関わり

● 荒谷集落でのビデオ（はぁーとふる荒谷塾）

震災で人口が激減、16世帯に 急に静かになってしまった集落をどうにしかしようという力（震災バネ）+外部の力がうまく働くことで、ポジティブな方向に持っていけるように。

中越では震災により過疎高齢化が加速 震災を契機に危機感、復興・活性化へのやる気が出て、「震災のおかげで」という言葉すら聞かれるようになった地域もある。日本の山間部における再生モデルを目指している。

● 活動の紹介

- お年寄りしかいない集落：コミュニケーション作り、村をどのように残すのか・終わらせていくのかを、外部者ではなく地域の人々が考えられるように（c.f.町に下りても生きがいを失い、亡くなる老人もいる）
- 雪かき道場：雪かきは危険を伴う仕事でありなかなかボランティア頼めない ボランティアにノウハウ伝授、お年寄りが師範として教えることで地元の人が生き生き（外部者はコーディネートするだけ）、外部者と地域の皆さんの双方が交流を持つことで元気になる。

● 国際協力と日本の地域振興

相違点...本質は同じ。言葉、文化の違い、問題点の指摘方法（日本でははずけずけ言えない、信頼関係の構築も重要）、住民の問題意識（日本ではとりあえずモノはある。だが過疎はゆっくりと進行）、高齢化した土地に外部者の若者が入ることの差（関係を続けるにはどうすればいいのか）

共通点...信頼関係構築、外部者の関与、住民の共通体験、小さな成功体験の積み重ね

- これからの地域振興：陳情型ではなく、集落がいかに自立して（地方分権にもつながる）活動を取り組むか。今のうちに農村の良さを都会に向けて発信、人間再生の場に。

<質問・コメント>

Q：国内では外部者が NGO,ボランティアなど多様であるが、海外では協力隊に限定されるのでは？それぞれにはどのような役割があるか？

A:海外においては部外者や訪問者はコンサルタントや顧客として農村に関わることが多くなるのでは。国内では、自分たちのような人間は協力隊員のような位置づけになるかもしれないが、その他の外部者

は、単に顧客と言うよりも、互いに相互依存の関係を築ける可能性があり、そのような特定の人同士が持続的に付き合う方法が必要になってくる。

例：中山間地では大量の米を生産できず、販路を拡大する必要もない。むしろ特定のあの生産者から買いたい、あの人に売りたいという関係を築くことが大事。



Q：中越復興市民会議はどのような団体か？協力隊のように復興のスペシャリストはいたのか？

A：任意団体で法人格なし。山古志での地域を見守る「生活支援相談員」から、もっと地域の元気を出そうという狙いで2名のノン・スペシャリストが活動を始めた。今年の4月から中越地域では「地域復興支援員」という制度が始まり、「中越復興市民会議」で行っていたような活動が、各被災市町村へと面的に広がりつつある。

Q：国内外で意見が言いにくいかが分かれる理由は、ノンスペシャリストとして見守る・伸ばすという立場とスペシャリストとしての協力隊の立場の差か？

A：ある程度同じ価値観を持っている日本人と、（所詮彼らにとって自分たちが）よそ者でしかない外国人と接するのでは、自ずと接する姿勢に差が出てくる。知っている人には言いにくいし、（同じ日本人として無遠慮に）反発も来ることが分かっている。外国人に対しては、良くも悪くも彼らの背景がわかっていない分、ある意味ずけずけとものが言えるのではないかと思う。ただし、海外の場合でも、信頼関係が構築できていない段階では、こちらが何を言っても真剣には聞いてくれない可能性がある。

Q：事前に行われた話合いと腹を割って話した時と何が違ったか、変わったか。

海外と国内では腹を割って話せるプロセスまでに違いはあったか？

A：外部者の目線が変わる。なぜ集会に来ないのか？という態度から、来てくれるにはを考えるようになる。具体的な要望も掴めるようになった。先進視察の影響も大きい。

A：日本の場合は最初に信頼関係を作ったりするかが大事。いかに“口実”を作って村に通うようにするか（畑を借りるなど）。

Q：JICA 南米経験者がやはり高地県の村で地域の宝探しを行っていた。日本の地域開発に海外経験を活かすのは一種のトレンドと思うが、日本全体で行われている試みやノウハウをまとめようとする動きはあるのか。

A：「復興プロセス研究会」などが大学の研究者を中心に進められている。しかし、復興ツールや手法の話ではなく、集落が被災以降どのように復興に向けて動いてきたか、また外部の関与などがそれに与えた影響はどのようなものなのかなど、復興のプロセス自体を研究しようとするものである。

Q：農村は耕作放棄地など疲弊の様子が分かりやすいが、逆に都市における疲弊を見る眼を鍛える必要があるのではないかと感じた。スマトラ沖地震における援助合戦、援助比べのようなものはあったか？政治家にはどのような役割があったのか？

都市部でも下町のような旧市街地では、高齢化が進むなど疲弊の様子は分かりやすいが、それ以外の所の疲弊と言うのは、とてもわかりにくく、定量的な評価も難しい。それよりも都市の問題と山間部の問題を上手くつなげ、解決できないかと思う。例えば、都会には職に就けない若い人たちが多くいる。彼らがうまく山間部に入っていく仕組みを作ることで問題を解決できないか。

山古志村では震災後の村長によるアピールのために援助が集中的した。が、援助においては押し引きが肝心で、援助側がたまに引くことで住民が自力で考えることができるのではないか。山古志ではそれがなかったので復興が少し遅いのではないか。

ここぞとばかりに票を集めようとした政治家の存在などは特に聞いたことはない。

Q：被災動物の救済における県の動きはどうであったか？

A：動物についてはよく分からないが、復興全般においては県より市町村の動きがキーになるのではないかと思う。川口町は小さいから動きやすいが、山古志は長岡市になってしまったから動きにくいという面も。復興震災基金というのがあり、集落単位でも使い勝手が良い。市町村に頼らず、いかに集落ごとで考えられるようになるか、が中越の方向性と目指すものなのではないか。

Q：山間部でペット（犬）を飼っている人が多いとペットへの目も違うのでは。

A：正直よく分からない。牛の角突きの時期の記事を見るとペットではなく家族や神様として考えている人もいるようだ。そのような考えから震災時にも牛の救出なども行われてたのではないか。

参加者の感想：

- ・ 興味深い話ありがとうございました。地域復興が始まるためには外部者のかかわりが必要であったり、しかもそれが押しやり引いたりしてバランスをとるべきものであることといったようにして進んでいくのだということが知れたのが興味深かったです。また、懇親会のときに、疲れていらっしやるのに、真剣に話を聞いていただいてありがとうございました。
- ・ お話どうもありがとうございました。援助は与え続けるだけでなく、固定の人がついて、押し引きをしてあげることが重要というのが印象的でした。現場を知っている人からの興味深いポイントだと思います。佐藤先生とのコメントのやり取りの中で、比較的目につき易い農村の疲弊に対し都市の疲弊を見る眼を養うことが必要なのでは、という話題が出て、都市（下町）や中山間地帯を結ぶというアイデアについて河内さんから触れられた折に佐藤先生が「そもそも若者に元気がないのが問題だね」ということをおっしゃっていましたが、それこそが河内さんの目指していらっしやる相互依存の関係なのではないかと思いました。つまり、都市の元気のある若者が、過疎で元気がないお年寄りを助けに行くという一方的なボランティアというよりは、雪かき道場の例にあるように、師範のおじいさんに、へなちょこの若者が叱咤激励されることで、農村の温かさを知り、元気をもらい、農村側もまた刺激を受けて活性化するという図式を目指されているのではないかと、思いました（がいかかでしょうか）。以上、お忙しい中貴重なお話をありがとうございました。
- ・ お話ありがとうございました。国内の地域振興、グアテマラでの農村開発の違いなどを比較しながら話してくださる等、非常にわかりやすかったです。人に対して問題点を指摘する際に信頼関係が大切になることを再認識でき、今後の自分の活動等にも活かせればよいと思います。
- ・ 途上国の農村と日本の農村の抱える共通点、相違点がとてもよくわかりました。地域振興と国際協力がどうリンクするのか、今までぼんやりとしか理解できなかったのですが、写真や映像、実体験に基づいたリアルなお話をお聞きして、ようやくわかったような気がします。ありがとうございます。農村の問題（マイナス）と都市の問題（マイナス）を掛け合わせてキャンセルする（プラス）という発想が素晴らしいと思いました。国内でこのような動きが活発になるとよいと思う一方、国



際協力の現場で途上国の問題、先進国の問題を掛け合わせてキャンセルすることは難しいように感じました。

- ・ どうもありがとうございました。ずっと物事の起こっているまさに現場で活動されてきた経験から導かれた提言が、実感がこもっていて興味深かったです。農村開発普及員としてのお仕事は想像以上に自由裁量があるようで、地域の人々の考え方などにまで影響していかなくてはならない、という点の苦労は中越での活動に大きく影響していらっしゃるのだろうな、と思いました。示唆的なお話で参考になりました。
- ・ お話ありがとうございました。コミュニケーション力の向上に力点を置かれている点に感銘を受けました。よく口では目に見えやすい援助だとか、支援に注目してばかりじゃいけないと言いますが、実際、実践しているお話を聞くことができ、興味深かったです。
- ・ 途中からの参加になってしまい、講演会でのお話をあまり聞けなかったのですが、集落を中心とした復興を考えていくことが大切であると言うことを学びました。ありがとうございました。
- ・ まず、山古志村の復興が遅いということに驚きました。また、押し引きが重要なポイントだとお聞きし、目からうろこでした。そして、ネットや報告誌では、中越復興市民会議の位置づけがわからなかったのですが、お話をお聞きし、より知識を深めることができました。貴重なお話をありがとうございました！
- ・ 途上国で学んだことを日本に生かすのとは逆に、日本で学んだこと、経験したことから、途上国を知ることでもできるのでは？と思いました。また、「本気で付き合える仲間作り」(復興、発展における social capital の重要性) から、social capital formation をどう都心で作り出すかということは、農村のよさを導入する一つの手段なのでは？と思いました。
- ・ お話ありがとうございました。タイトルの「グアテマラから中越へ」が、最初は何も思っていなかったのですが、お話をお聞きし、その意味がわかり、とても興味深かったです。遠いところからありがとうございました。
- ・ 海外と日本の農村に入ったときに、物の言いやすさに違いが生じていたという点が、私が予想していたことと異なり、印象的でした。私が農村に入るのは、研究の一環としてフィールドワークを行うことがほとんどだと思います。フィールドワークの際は「自分が何を行おうとしているのか、自覚的であれ」と言いますが、同時に、どのような立場で行くのか、そしてそれをどのように示す、示さないのかということにも自覚的であるべきだと改めて感じました。
- ・ 先日、開発学会の昼食時にお会いした、小川真由と申します。本日はありがとうございました。グアテマラでの開発についていくつかのプロジェクトを紹介していただき、それぞれの村の特徴とともに、プロジェクトの詳細についてうかがうことができ、大変興味深かったです。「グアテマラにあって、日本にないもの」を私も覗くことが出来たように思いました。本日はありがとうございました。また、中越でお会いできるように、これからのコンペがんばります！！

(議事録担当：中条 (M1.5)、岡田 (M1))